

仏様のおはなし新シリーズ第49集その2 「水子供養」

私の住むお寺は福岡市の中心部にあります。場所柄のせいか『水子供養』の相談で若い方が時々来られます。

『水子供養』と言っても、その心持ちには二通りあるようです。

ひとつはこの世に生まれさせることが出来なかった子に向けて悲しみや成仏を願う心をこめての『追善供養』の意味。

ふたつめは自分たちの都合で殺してしまった子への贖罪・祟りを恐れての『お祓い』の意味でしょう。浄土真宗は『追善供養』も『お祓い』もしません。

それは、私たちのいたadakお念仏の教えは『往生即成仏』。つまり、どんな者も阿弥陀仏の「必ず・漏らすこと無く仏と成して救う」という本願力によって、この世の縁尽きたとき即浄土に生れて仏とならせていただくと、お聞かせいただいているからです。

また、仏教は『靈魂』というものを否定しています。どんな者も他の様々なものとの関わりの中で存在するのであり、実体的な“私”“私の魂”は存在しないとします。

したがって、迷ったり成仏が定まらないということではなく、また悪霊が祟るとの考えも無いので『追善供養』『お祓い』ともにいたしません。

しかし「しません」と言ってしまうと、他の所に行かれるだけでしょう。せつかくのご縁、お念仏の教えをお伝えしたのでとりあえず本堂に上がっていただきます。

お話をうかがって、それからともにお参りをします。それは追善でも祓いでも無く『葬儀』をお勤めします。もちろん先に述べたお話をさせていただいた上で、多少簡略化した形ですがお葬式をいたします。

それは、たとえ胎児・嬰兒であつても『人間』だったということです。短い縁でも自分たちの子であつたということを噛みしめながらお勤めをすることは大切でしょう。

以前、生後数日で亡くなったお子さまの葬儀を勤めたことがあります。お通夜の席で、ご仏前に座布団の上に寝せ小さなタオルをかけられたお姿を見たときは胸が痛みました。

出棺のときの喪主挨拶で、赤ちゃんのお父さまの「たつた数日でしたが、親子でいてくれてありがとう」とのお言葉を有難くお聞かせいただきました。この親子は

母さんを仏さまに遇わせ続けてくださる。この親子はずっと親子なのだと思います。

せつかくご縁があつて親子となつたのです。たとえ生れて来なくても、短い生涯でも、親子であつた事実は決して消えません。お祓いをしても無かつたことにはなりません。

私に縁のあつた浄土の仏のおひとりとしてお付き合いしてまいりましょう。お姿は見えませんが、手をつなぐことは出来ませんが、手を合わせる私のそばで私のことを常に気にかけて思つて下さっています。そういう心でお念仏申しましょう。

この前、見るからにチャラチャラした感じのカップルが訪ねて来られました。

てつきり『お祓い』の意味で来られたと思い、ちよつと厳しめに言つてやろうと思つていたら、ご仏前で二人で手を合わせながら泣いておられました。見た目で判断しちゃだめだなと、大いに恥入り反省したことでした。

